

## 第五十回中部日本学生

### スキー選手権大会を記念して

中部日本学生スキー連盟

会長（名城大学学長）兼 松 顯

この度、第五十回中部日本学生スキー選手権大会を記念して「中部学生スキー五十年の歩み」が発刊されることになりました。この記念すべき機に、会長として記念誌に寄稿する機会を得ましたことを、大変光栄に存じます。過去の記録を見ますと、一九五六年（昭和三十一年）に第一回の大会が富山県で開催されたときには、僅かに5大学の参加であったと記録が残っておりますが、第五十回記念大会を挙行する本年は、男子校二十一大学、女子校十五大学の加盟と登録選手は約二百名に至っております。今大会は、ここ数年のスキー人口の減少により加盟大学、登録選手数は減少しているもの全国有数の学生スキー大会として発展してまいりました。これも偏に、昭和三十一年の設立以来、歴代の中部日本学生スキー連盟の役員の方々のご努力、加盟大学のご協力、長年にわたる中日新聞社等のご後援、ならびに大会開催地関係者のご助力によるもので、この継続的な発展をみる事ができましたことに對しまして、深く感謝申し上げます。

五十年の歴史を振り返ってみますと、今日のスキー連盟に発展するまで幾多の困難を乗り越えて発展してまいりました。設立当初は、連盟規則、競技規則も判然とせず、問題が発生すればその都度会議を持ち決定せざるを得ない手探りの状態から、組織を強化し制度化してま

いりましたことや、競技の運営においても計測方法は、ストップウォッチ時代から電気時計による計測を経て今日のようにコンピュータで選手がゴールすれば瞬時にタイムと順位が判別できるように発展してまいりました。これもすべて手弁当で運営を支えてきた競技役員の方々の懸命な努力の結果であります。この変遷は、スキースポーツの向上への情熱と、学生スキーの発展に資するスポーツマン・シップとが礎となり、長い時間をかけて築き上げられてきたものです。この精神は、五十年を経過した後も継承し後世に伝えていかななくてはならないと思えます。

さて、学生諸君がスポーツに精進することによって、体力、精神力を養うことは申すまでもありませんが、技量の練磨にあたって、自分自身の能力の分析を基にした創意、工夫の積み重ねが不可欠なことは、ご存知のとおりであります。自主的に、このような精神的活動に熱中できるところにも、学生スポーツの大きい意義があるのではないのでしょうか。この訓練の効果は、スポーツの問題にとどまるものではない筈であります。さらに、スキー部における多くの学友と切磋琢磨し、この学生スキー連盟を通じて、他大学の学生との交流親睦は、自己または小集団に閉じ込めりがちと言われている現代の学生諸君にとつては、貴重な経験になると信じております。この五十回記念大会の機会に「連盟五十年の歩み」が刊行されることから、中部日本学生スキー連盟の歴史と記録を辿るのみではなく、私は、時代の流れとともに、学生諸君がスポーツの意義をどのようにとらえてきたか、例えば他大との親睦にどのような意味を見いだしてきたのか、その意識の移り変わりも知っておきたいものだと思っております。また、選手の活躍は、在学生はじめ卒業生や大学関係者に、母校に対する連帯感と誇りを与える効果も大きいことと思われれます。

終わりに、この記念大会の運営について、ご関係の皆様のご尽力、ご高配に厚く御礼を申し上げます。またそれに答えて、選手諸君がそれぞれの実力を発揮して、悔いのない競技会でありますように期待しております。

## 中部日本学生スキー 五十回記念大会誌祝辞

中日新聞社  
代表取締役社長 大島寅夫

中部日本学生スキー選手権大会が昭和三十一年に富山県宇奈月温泉スキー場で誕生して以来、今年で五十周年を迎えました。大会関係者の皆さまに心からお祝いを申し上げます。

当初は五大学の参加で開催された本大会も、現在は男子二十一大学、女子十五大学参加しています。歴史と伝統を継承し、全日本学生スキー選手権大会に次ぐ選手権大会に発展しました。今までの参加者の中には、この大会をステップに全日本選手権大会、全日本学生選手権、国民体育大会、などで活躍した人も多く、全国大会への登竜門として大きな期待が寄せられています。

大会に参加される皆さんが日頃の練習の成果を充分に発揮され、また仲間と交流を深められる事を期待してやみません。

中日新聞社は主催者として競技の詳細を紙面でお伝えしています。大会の報道が、厳しい練習に取り組む皆様の励みになれば幸いです。

今後この大会がますます充実・発展されますよう関係各位の一層のご指導とご協力をお願いして、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 継承二十五年を回顧して 歴史と伝統の引継ぎ

副会長・大会委員長  
梶原進 (名城大学卒)

昭和三十一年一月二十八日から富山県の宇奈月温泉スキー場で、第一回中部日本学生スキー大会が開催されて以来、今大会で五十回を数え、記念大会として開催する事が出来ました。これも偏に、役員、加盟大学の選手諸君の協力と、大会を開催するにあたって、ご共催とご後援いただいたきた中日新聞社並びに放送局等の報道機関、開催地の町村ご当局、地元の競技役員、宿舎、施設、関連団体等のご支援とご協力を忘れることは出来ません。特に、白馬村ご当局におかれましては四十二回、西山・岩岳スキー場で三十九回もお引受いただき、本連盟のホームゲレンデとして開催出来ましたことに深く感謝申し上げます。

スキー人口減少の影響で、男子二十二校、女子十五校が加盟し、参加選手約二百名であります。五十年の歴史と伝統を継承し、名実ともにスキー大会では全国有数の大会に発展出来ましたことは、本連盟にご理解とご支援賜りました地元関係の皆様のおかげと、各大学の卒業生(連盟役員含む)及び現役スキー部員による手作りの大会運営にあると思います。また、発足当時から連盟に関わり、これまで連盟の発展と学生スキーの推進にご尽瘁された工匠先生(平成十三年一

月十五日故人を忘れることは出来ません。今後も地元協力関係の皆様と、各大学の卒業生及び現役スキー部員と団結して、六十回、七十回と連盟の伝統を継承して行きたいと思しますので、今後とも、ご支援とお力添えのほどよろしくお願い申し上げます。

第二十四回大会が終わり新年度を迎えた時、工匠先生に呼ばれ、二十五回大会から君が中心になって連盟及び大会の運営をやりなさい。と継承依命を受けた。諸先輩方がたくさん居られこと等の辞退の理由をいろいろ述べたが、俺の目の黒いうちは誰にも口出しはさせぬから、学生が希望するうちは続けていかなければならない。と説き伏せられ、承諾させられてしまった。以後二十五年、運営年数では工匠先生と同じとなったが、やっと先生の背中が見えるところまで来ました。これからも学生が希望する間は、皆様方と一緒に力を合わせ、力の続く限り連盟の伝統を継承して行きたいと思しますので、今後とも、ご支援とお力添えのほどよろしくお願い申し上げます。

継承二十五年ということから、私が中部学生で経験出来なかった、経験とご苦労及び運営について、工匠先生がこれまで記念誌にご寄稿いただいた内容を載せさせていただきます、当時の歴史と大会運営の様子やご苦労について述べられておりますので、お読みいただき、大会運営の難しさと協力の大切さを皆さんにご理解いただき、地元協力関係の皆様と、各大学の卒業生及び現役スキー部員の一体協力無くしての発展継承は難しいことや、今までの人的交流の素晴らしさと、人生、会社組織、家族は巡り合わせを上手くすることで良い結果となることをご理解いただき、その後に継承二十五年を回顧させていただきます、五十年の間に卒業された方の思い出やご苦労の素晴らしさを語ったご寄稿文と合わせ、永遠に続く後輩達が体験できますよう、卒業生の皆さんのご協力とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

#### 【工匠副会長の今までのご寄稿文から】

中部日本学生スキー選手権大会の誕生から歴史を後の為に記すことにしました。

昭和三十年頃の学生スキー大会は、全国的組織として全日本学生ス

キー連盟(インカレ)があり、その他に地域別に北海道学生スキー連盟、東北学生連盟、関西学生スキー連盟等があり、また、大学数も数は多くなかった。中部地区にも学生スキー連盟を設立したいという希望が出て来た。当時、富山大学が中心になって、スキー大会を開催したいという働きかけがなされ、昭和三十年初冬、富山大学スキー部の学生が、名城大学の私の所に来学して、信越地区「信州大学、新潟大学」北陸地区「富山大学、金沢大学、福井大学」の賛同を得たので、是非東海地区では名城大学の参加が無くては、中部学生スキー大会としての形態が整わないので、参加されたいとの要請があったが、名城大学としては加盟は承認するが、急なことなので、来シーズンの計画もあり、次回以後に参加することを約した。

中部日本学生スキー大会が誕生して以来、大会が四十回継続して毎年開催されたことになる。役員、加盟大学の選手諸君の協力があり、又、大会を開催するにあたって、ご共催とご後援戴いた中日新聞社並びに放送局等の報道機関、開催地の町村ご当局、地元の競技役員、宿舎、施設、関連団体等のご支援とご協力を忘れることは出来ません。四十回大会のうち、三十二回も白馬村で開催され、二十九回は岩岳西山スキー場で行われた。この大会の会場を永きにわたりお引受いただいている白馬村をはじめ、スキー関係者、特に西山ヒュッテの平林堅先生のご指導によって発展してきた大会であった。平林先生は若い時から、全日本スキー大会等で活躍され、マスターズ大会では上位に入賞されている実績の持ち主でもあり、この方のご指導で大会が行われて来たことは、忘れてはならないことである。

この大会を支えてきた初期の役員は、信州大学(矢野想之輔(医師)、石川智朗(小谷村村議)、富山大学(伊地知信人(北越銀行)、野村草(大垣共立銀行)、尾山昌吾(北陸電鉄))、新潟大学(岡田照夫、河上明雄)、福井大学(熊田忠夫)、名城大学(加藤晃(中村百貨店)、工匠忠雄(名城大学)の諸氏であった。各大学のOBのご努力に対し、深甚なる謝意を表したい。

第一回大会は富山県宇奈月スキー場で、昭和三十一年一月二十八・二十九日に富山大学のOB・現役員・宇奈月スキー倶楽部の後援で

開催され、加盟校は信越、北陸の国立五大学で発足し、種目も回転、滑降、長距離、リレーの四種目で、参加選手も七十名程度であった。女子回転は猛吹雪のため中止となり、富山大学OBの伊地知、野村、尾山氏等が苦勞して開催された大会でもあった。優勝校は新潟大学であった。

第二回大会は信州大学を当番校として、野沢温泉スキー場で開催され、地元の富井信州大OBのご協力で出来た大会であった。この大会から名城大学も参加し加盟校も六大学となり、名実ともに、中部学生スキー選手権大会となった。

連盟規則、競技規則、細則等も判然とせず、男女総合化や男女別々の総合優勝の決定もしておらず、問題が発生すればその都度各大学のOBが集合して、会議を持ち決定せざるを得ない状態であった。今後の大会運営にあたり、連盟組織を強化し制度化するよう申し合わせを行ない、この大会から、工匠先生が矢野顧問、石川・伊地知副会長等とこの大会以後中部学生を通じ長く役員として深く関わりを持つこととなった。優勝校は、男子名城大学、女子信州大学。

第三回大会は、新潟大学が当番校で池の平スキー場で開催された。当番校が地元スキークラブに全面的に競技一切を一任したので、コースの選定、運営方法も地元クラブに委ねられ、女子選手のレベルに合わないコースであったため、連盟よりスタート地点を下げるよう要請したが、聞き入れられずそのまま続行され、怪我人続出でその救助にOBがあたるという大変な大会であった。地元クラブに対して、新潟大学の石巖先生(元SAJ理事、オリンピック監督)今井三郎先生方の大会運営に関する変更改善の要請も不調に終わったことは誠に残念であった。その当時の当番校制では、大会が終了すれば責任が解除され、記録や備品の引継ぎもなく、加盟校数、参加選手数の増加により、学生の役員だけでは連盟の運営は大会に支障をきたすであろうと、各大学のOBによる緊急会議を開き、連盟組織の強化確立のために当番校制を廃止して、連盟本部制度とする連盟規程を作成し、以後本部を名城大学に設置することを決議した。

第四回、五回大会は細野名木山スキー場で開催され、信州大学の石

川氏、氏の大町高校時代の友人中村孝光氏(五竜館・長野電鉄のご尽力で、種目もアルペン競技に大回転、距離競技に耐久(三十キロ)を加え、充実した大会にすべく役員は情熱を燃やし、OBの手による連盟の自主的運営に乗り出した。当時連盟にはゼッケンは勿論フラッグも無く、何の備品も無い貧乏連盟であった。最低必要なゼッケンや備品を購入したら、連盟の資金は皆無となり、OB役員は旅費も宿泊費も自ら支払い、全くの手弁当の出発であった。しかし、大会運営には全力投球で、朝は五時に起床して、「輪カンジキ」を履き、谷では腰まで雪につかりながら有線電話の電線を張り、距離コースにつけに走り回り、一人三役、四役も兼ねての大奮闘であった。夕方は暗くなるまで、翌日のアルペン競技のポールセット、夜遅くまで明日の準備等、今から思えば涙と汗のにじむような大会運営であり、まさに超人的な活躍ぶりであり、経験の少ない若い役員でもやれば出来るという自信に繋がった大会でもあった。大会に使用する有線電話機当時は、ハンディートキーは無かった)は、中部電力白馬変電所のご好意で借用していたが、もし、送電線の故障が発生したら直ちに返却する約束で借用したので、何時連絡があるかも知れず、そうなれば大会も続行できない状態になるので、事故の無いことを神にも祈る気持ちで、寒い冬に汗のかき通しの大会であった。役員も選手も一体化した大会で気苦労はあったが、満足感と充実感で一杯であった。特に、矢野氏の友人である松本医師(京都府大外科)にお手伝いいただいたが、医務と競技役員を兼ね、夜は、能筆であったため賞状書きもしていただいたことは記憶に残るところである。

第六回大会は、新設の石川県鶴来町獅子吼高原スキー場で開催し、後日行われた高松宮賜杯中部日本スキー大会の前哨戦にもなり、町中に両大会併記の歓迎ポスターがはられ、大会気分は盛り上がった。尾山氏、石川県スキー連盟会長越野氏(故人)、理事長西原雅氏(故人)、元SAJ理事、東海北陸ブロック会長、鶴来町の角永観光協会会長、太田実氏のご尽力で出来た大会であった。この大会以後、大会名を中部日本学生スキー選手権大会とし、連盟名は、中部日本学生スキー連盟と改称した。中日新聞社も後援から共催となり、この大会より元スポ

一ツ事業部長の加藤英雄氏(元SAJ理事、愛知県スキー連盟理事長)にも連盟発展のためご協力いただいた。参加大学、選手数も増加し、大学のスキー大会らしくなつて来て、新装のスキー場であつた鶴来町民の熱烈な歓迎を受けた。獅子吼高原スキー場は、立地条件が高知であつたので、地形の關係上アルペン山頂で、ノルディックは鶴来高校前をスタート・ゴールとする会場で行われた。たまたま日本海特有の冬の移動性高気圧の通過による風速三十六メートルの突風が吹き、ゴンドラは停止し、雪、あられ、みぞれ、雨と落雷を伴つた悪天候となり、一年中に降るものが一度に降つたといふなかで大会が続行された。競技中報道にあつていた新聞記者が、寒さと荒天のためこん倒して、小屋に担ぎ込まれるハプニングまで起きた。強風のため日本の潮水が巻き上げられ、高原に吹き付け、参加選手のエッジに赤錆が出来る程であつた。荒天のため「雪崩」も起きたが、幸いにも怪我人も無かつたことは幸運であつた。

第七回大会は、野沢温泉スキー場で開催し、信州大OBの河野氏のご協力で、本部を亀屋とし、片桐匡氏(長野県スキー連盟会長)、桐屋の片桐氏、観光協会の宮沢賢治氏のお世話で無事終了した。

第八回大会は、西山スキー場で初めて開催された。平林氏(西山ヒュッテ)と相談し、他に例をみない各大学OB役員、現役選手、地元役員が一体となつて大会を運営する方式を生み出した。旧西山ヒュッテ前を、アルペンはゴール、ノルディックはスタート・ゴールとして行われた。この大会でも掲示はストップウォッチで行われ、各大学持ち寄りの時計を使用して、役員が前夜より調整したものを使つて計時したが、大回転競技中寒さのためストップウォッチ作動せず、新潟大学の笹木君、中京大学の菊池君のタイムが計測できず、両君を止むを得ず再レースを行った。その結果、各大学から抗議が出て、深夜まで協議し連盟の失態ともなり、平林氏に大変ご心配をおかけし、苦い経験となつた。

第九回大会は八方に戻り、大谷袈裟義氏(ローゼンハイム白馬)、丸山庄司氏(SAJ常任理事等)のご協力で、平穩無事な大会であつた。第十回から十二回大会まで、三年間榎池高原スキー場で行う約束で

開催された大会であつた。同時に、全日本学生スキー大会も三年間行われた。石川氏(インカレ現地責任者)、猪俣三夫氏(旅館榎池)のご協力で開催し、男子校も増加したので、この大会から男子二部制に編成替えし、ますます充実した大会になつて来た。

第十回大会には、全日本学生スキー大会の急造ジャンプシャントエが流失したり、大回転競技では、最終シードの花岡実君(信州大学)が、信州大学スキー部でも、ノーマークの選手が逆転優勝したといふエピソードのある大会であつた。また、最終のリレー競技役員が足りず、ゴールの役員は、私と富田三代治氏(名城大学OB)の二人で選手をスタートさせ、大学別、女子別のラップタイムをとり、タッチを確認し、ゴールの計時を記録するという今から思えばぞつとするような神業的な役員構成で有つた。

第十三回大会以来、今四十周年記念大会まで二十九回の永きにわたつて、岩岳西山スキー場を本連盟のホームグラウンドとして大会を開催出来たことは、偏に、平林氏、宮田与助氏、横沢要雄氏をはじめとする地元関係者、民宿代表者、スキー学校関係者、そして、白馬村当局の絶大なご協力があつたからこそ、今回まで大会が継続できたものと深く感謝申し上げます。深甚なる敬意を表するものであります。また、今日までご共催いただきました中日新聞社事業局(高橋大吉氏、富井敏人氏)に対し厚く御礼申し上げます。また、永年にわたり本大会を取材してくださいました中日新聞の杉田芳郎氏(現青少年協会理事長)と山本太一郎氏(現三好カントリー支配人)に対し厚く御礼申し上げます。特に山本氏には、毎年発行のプログラム最終ページの過去の記録表の整理にご協力賜り、連盟と大会運営のご助言をいただきましたこと、誠にあり難く重ねて御礼申し上げます。

現在の役員は、名城大学の梶原進一氏を中心に、名古屋工業大学の小林明彦先生、名城大学の富田三代治氏、金沢大学の谷吉生先生、中京大学の矢口公勝氏、東樹明仁氏、名城大学の高橋稔氏の諸氏が中心となり、現在の連盟運営がなされている。今後引き続き連盟発展のためご努力をお願いします。また、本大会にご協力くださり、暖かく本連盟の成長を見守ってくださいましたOB役員や、地元の関係者の

方々に御礼申し上げるとともに、始終一貫、本連盟をご支援いただいた白馬村ご当局、中日新聞社並びに岩岳関係団体に対し今後もご助力いただくようお願いする次第であります。

と、記念誌に回顧執筆されております。また、ことある毎に後世に残して行かなければならない旨を聞かされて来ました。こうして振り返りますと、工匠先生の功績はあまりにも偉大で、存在感があり、先生無しては現在の中部学生は存在しなかったということを痛切に感じます。

そうした重荷を背負い悪戦苦闘の日々を繰り返しているわけですが、当初、二十五回大会は工匠先生の労を労う意味と、連盟で初めて記念大会(以後、五年毎に開催)として開催することを決意し、先生のお力添えをいただきながら、記念誌発行とレセプションの企画から始め、現地打合せ、理事会(大会関係及び収支決算)、評議員会(抽選会は割り箸し抽選、現在はコンピュータ抽選)、中日新聞社、北陸中日新聞社、日刊県民福井の共催のお願い(中日新聞社(高橋大吉氏、中川孝介氏、現馬庭重行氏の三氏の部長さんにお力をいただいている)、中日新聞運動部及び共同通信社運動部に協力をお願い、資金不足のためミスノ株式会社名古屋支社に協賛(セツケンの提供)のお願い、地元協力関係者へ後援及び協力と開会式出席のお願い、手作り大会(連盟、現役員、地元協力関係者)のため、各大学の卒業生や卒業生の勤務先への役員依頼、協賛広告のお願い(各大学にだけお願いするだけでなく、私も会社に出向いて懇願する)、プログラム作成(当時は手書きのため徹夜作業、三十六回よりコンピュータで作成)を始めとする大会準備、大会前に現地入りし、白馬村村長(元横沢裕村長、現福島信行村長)さんに開会式の挨拶のお願い、地元協力関係者(民宿協力会、岩岳スキースクール、岩岳観光協会、岩岳観光株式会社、白馬観光開発株)、岩岳営業所、パトロール)に協力をお願い、競技会場設営(当時はポールセツト後、参加選手によるツボ足、コース図作成(選手会発表のため)、各大学にゼッケン及びプログラム・参加章配布準備、開会式準備・進行(二十回大会から開会式に選手の行進を取り入れ、選手宣誓も男女交代とした)、選手会、大会本部で翌日の競技プログラム作成(こうした一

連の作業を終えると午後十時を過ぎる)、競技運営(以前は前日に雪が降れば、ゴールからスキーを履いてコースを踏んで登る。計測はストップウォッチ、十八回大会から電気計時、三十七回大会からアナウンス入りと電光表示(現地のコンピュータとの連動に現理事の渡辺氏、西山ヒュッテの平林英夫氏の努力があつた)、怪我人の対応、三日間の競技の入賞者及び総合成績賞状書(三十一回大会から四十八回大会まで伊地知副会長の奥様に協力いただいた)、得点一覧表作成、報道関係成績配布、閉会式準備・進行、卒業生役員等旅費精算、民宿協力会へのお礼、地元協力関係者お礼の挨拶、連盟事務局にて中日新聞社はじめ報道関係者、ミスノ名古屋支社、連盟現役員、各大学の卒業生役員及び勤務先、白馬村村長、地元協力関係者に礼状送付、これで私の仕事は一応終わりとなるが、最後に工匠先生に全て報告してジ・エンドとなる。良くやった。ご苦労さんといって励ましの言葉をいただく。．．．二十五回はいきなり大きな事を計画し不安であつたが、皆さんのお力添えを賜り無事終了した事に、充実感と次回大会への自信がついたように思えた。私が選手の時にお世話いただいたので、今度は私が出ることやらなければと思つて始めたことが、私の人生に素晴らしい人との繋がりが大いに役立っており、今になって、こんなチャンスを与えてくださった工匠先生に感謝しております。以後、前述した連盟としての仕事と、常に現役スキー部員には、学生時代の良き思い出となるよう理事の皆さん方と相談しながら頑張っています。

因みに、お手伝いしていた時代から回想いたしますと、ストップウォッチ時代は、十七回大会まで続いた。三人から五人のグループを四(五グループ作り、通し時計でヨシ!の合図でそのグループは一斉にストップウォッチを押し、選手のゼッケン番号を覚えておき、選手がゴール前の斜面に入ってきたら、ゼッケンコールを聞き、ゴールの延長線上に並び、ゴールコールの笛の合図でストップウォッチを押しタイムを計っていました。十八回大会から電気計時になり、三十七回大会から今日のように選手のスタート・ゴールのアナウンスもコンピュータで、選手がゴールすれば瞬時にタイムと順位(上位だけであるが)が分かる方式となつた。また、怪我も大きな悩みの一つであつた。お

手伝いしている時代は、男子滑降では技術が及ばないのか、緊張・集中力の持続が出来ないのか、二・三人の骨折人が出ていました。競技役員は緊張や集中をさせるために、ワザワザ雪を集めコース上に大きく盛り上がった箇所を作ったり、全選手がツボ足でスタートからゴールまでコースを踏み固めたりしたが、いつこうに改善されなかったのので、コースを西山スキー場のバーン最上部を左に縦断させ、最大斜度四十度近い斜面にターン二箇所入れ、一気にゴールさせるコースセットとしたが、一人の怪我人も出なかった。岩岳スキー場を使用するようになってからは、高速ターンを要求するセットになり、女子選手でスピードのコントロールが出来ず、オーバーターンで木に激突し大腿部骨折、男子滑降競技では、少しでも良いタイムをとの思いで、ゴール前でクローチングを組んで頭を下げたままゴールポストに激突、クロスカントリーの耐久(三十キロ)では、途中で体調が悪くなり宿舎に帰ってしまい、大騒ぎとなったり(ルール通り関門員または役員にその旨を伝えることの大切さ)、フリー走法の導入で体力が付いて行かず呼吸困難や痙攣を起こし救急車で病院に運んだり、競技期間中は気の休まることが無かった。幸いにも選手が怪我をしても人生に大きな負担になるような事無く続けて来られたが、責任を問われる時代となり出来るだけ補償が出来る傷害保険に加入した。リフトはダブルやトリプル、ロープウェイとなり、競技のコース作りもツボ足から機械でバーンをならし固めてくれる。選手が履く板も、両端の幅が広く長さも肩位に、また可動式ボールの採用とともに滑り方や、競技内容・方法も時代とともに変わって来た。地球温暖化の影響で雪が降るのが遅くなり、量も少なくなってきた。人口降雪機の出現により雪の心配は解消されたかに思えたが、気温が下がらず降雪機の使用にも影響が出て来ている。

二十二回大会から、経費節減と手作り大会運営現役スキー部、卒業生・連盟役員、そして地元協力関係者を目差すことから、学生役員として、仲間が通過する旗門の判定を兼ねた。また、二十回大会以降三冠王が次々と誕生し、国公立大学も総合優勝する時代となって来た。白馬村では、国体、ワールドカップ、長野オリンピック白馬会場と

ビッグな大会も招致し、大変なご苦労をなされた年も変わりなく、中部学生の大会を快くお引受くださりありがとうございました。

第二十七回大会の二日目の大回転競技では、競技途中で猛吹雪となり競技を中止し、選手は直ちに下山するよう指示し、最後に見廻りながら降りて行くも視界が利かない。途中で女子選手が突風にあおられコース外に吹き飛ばされ、もがいているところに出会い、驚ぶかみで選手を引き上げ、全選手が無事下山出来るか不安だったが、無事全員のを安全を確認し、安堵したことは鮮明に記憶している。

三十回は二回目の記念大会とし、多くの卒業生にも大会に参加していただくために、第一回OB・OG大会を開催し、多くのOB・OGの参加で盛り上がった。また、今大会から開会式も華やかさを出すことから選手の行進を取り入れ、選手宣誓も男子校と女子校交互に行なうようにした。

卒業生役員のお願ひも、各大学卒業生の住所が分からず苦労していたが、第一回のOB・OG大会で多くの参加があったことから、三十一回大会から各大学一名を選出し、実施した。

三十二回大会は、二十五回大会以降五百名前後の参加選手も安定してきたことから、もっと活力と氣勢の上がる大会にするため、男子を三部制に、三十六回大会から加盟大学が三十八校となったこともあり、女子を二部制に編成替えした。また、四十回大会は参加選手が八百十五名と最大数となった。さらに、クラシカル走法およびフリー走法が全日本の大会に採用されたので、本連盟も全日本に倣い両走法を採用すると共に、女子に五キロフリー走を新設し、大会内容は充実し盛り上がった。

四十一回大会は、選手や一般スキーヤーの安全に配慮し、滑降競技をスーパード回転に種目変更し、大会は更なる活気で盛会であったが、四十六回からスキー人口の減少により、本大会の参加大学も三十四大学三百七十名に、四十九回大会には、二十二大学百七十五名の参加選手と激減している。このままでは、連盟の存続に関わって来るとの思いから、連盟と選手が話し合い、スキー界の繁栄には時間がかかるが、連盟の取組として、他のスポーツ選手や一般学生に負けない信用・信

頼を勝ち取るために、各大学と連盟役員が一丸となつて、よく話し合い、決めたことを守り、全員で行動し、社会人として淘汰の時代に、信用・信頼され選ばれる人となるために、テーマを決め修練して行くことと取り組んで来たその成果を、本大会に発揮していただきたいと思ひます。そして、四月から社会人となられる諸君は、今後も継続して修練していただきたいと思ひます。さらに、各大学と連盟役員の方々は、常識な事として身に付くように継続してご指導いただくことをお願いいたします。

連盟として、競技内容をさらに充実と活性を図るため、四十七回大会から男女クロスカントリースキー競技にコンバインド種目を新設し、男子十五キロクラシユカル競技及び三十キロフリー競技を、十キロクラシユカル競技、十五キロフリー競技に距離を変更した。さらに、十五キロフリー競技のスタートにパシユート方式(十キロクラシユカル競技の成績順にスタートするので、順位が分かり易い)を採用した。

四十九回大会は、女子アルペン競技に男子同様スーパードリフトを新設し、三種目とした。これでアルペン、クロスカントリースキー競技男女共三種目となった。しかしながら、四十九回大会は二百名を切る参加選手数となり、発足当時と同じ状況となった。男子は三十二回大会から三部制に、女子は三十六回から二部制に編成替えし充実と活力ある内容であったが、スキー人口の減少が競技の経費及び効率化の妨げとなり、止む無く五十回の記念大会から、男子二部制、女子一部制に編成替えし、現役スキー部・卒業生、連盟役員、そして地元協力関係者の三組織が一致団結した手作り大会の推進、中日新聞社の更なるご支援と、大会を伝える記事を礎として、繁栄を目指し努力して行く事が、競技スキー、強いては学生スキーの繁栄を呼び戻すことに繋がる事を信じ、頑張つて行きます。

これまで西山・岩岳スキー場で三十九回も開催出来たことは、大会の窓口として岩岳観光協会、競技会場設営及びオペレータ関係をスキー学校、大会設営及び競技会場の圧雪等選手が競技し易い状況に岩岳観光株式会社、雪不足時の山頂を競技会場の尽力に白馬観光開発株式会社、選手の怪我対応にパトロール、大会の請負で民協協力会とそれ

ぞれに大変ご尽力をいただいておりますが、特に競技に関する問題については、矢口公勝さん(現競技委員長・インナービレッジミヤマ)、競技計時のオペレータで平林英夫さん(元西山ヒュッテ)と松沢正明さん(ロッジやまき)、大会請負と更なる選手のお世話の組織作りにご尽力された松沢道夫さん(ロッジつらら)と松沢賢治さん(故人ロッジやまきオーナー)、皆さん方には特にご尽力賜り厚く御礼申し上げます。また、中日新聞社、中日スポーツ運動部記者の皆さん、並びに共同通信社運動部、北陸中日新聞、日刊県民福井の皆さん、選手が輝いている姿を伝えていただき、選手の活力の支えとなっております。そのご苦勞に対し感謝申し上げます。

これまで順調に継続して来たように見えますが、連盟も地元も世代交代時には、お互いの理解と協調がギクシャクした時期もありましたが、今は現役スキー部員が一杯悔いの無い戦いをし、青春の良き想い出としていただくことと、社会人として何事においても選ばれる人であり、信頼される人であつて欲しいと願ひ、皆さんと力を合わせ大会運営にあたつていきます。

五十年記念大会まで母校の名譽をかけて活躍した数多くの選手諸君と、卒業後も各大学で育成されたスキー部の伝統と精神力により白銀の中で競技したことを忘れることなく、中部日本学生スキー選手権大会に出場した想い出と、感激を青春のページとして書き、役員OBと共に、永遠に続くであろう本大会の発展する未来を信じ、今後共各大学のスキー部の現役諸君とOBの諸氏に対し、最大限のご協力とご援助をお願いする次第です。

最後に身内ごととなりますが、二十五回大会から私を支えてくださいました、連盟会長を快くお引受くださつている名城大学歴代学長先生方のご理解と、矢野想之輔顧問、石川智朗、伊地知信人、小林明彦各副会長、富田三代治常任理事、そして、毎年大会の前々日からご同行願つていらっしゃる東樹明仁常任理事、遠方で合宿や大会があつても必ず大会準備までに駆けつけてくれる高橋 稔常任理事、大会に欠かせないオペレータを引き受けていただいている渡辺 隆理事、陰日向に支えていただいている林 宣孝・大谷吉生各常任理事、福田和俊理事はじ

め、現理事の皆さん方のご支援や支えなくしてここまでこれなかったと思えます。本当にありがとうございます。今後も、一層のご支援賜りますようお願い申し上げます。

## 中部日本学生スキー選手権大会

### 五十回記念大会によせて

常任理事・競技委員長

矢口公勝(中京大学卒)

中部日本学生スキー選手権大会第五十回記念大会、誠におめでとございます。一口に五十回といってしまうえば簡単であります。ここまで大会を開くには、並々ならぬ関係者のご苦労があつたことと思いません。特に、永きに亘り本大会を主催されました歴代中部日本学生スキー連盟の皆さん、運営・参加にご尽力いただきました加盟大学や、ご支援賜りました中日新聞社をはじめ、関係各位の皆さまに厚く御礼申し上げます。

開催当初は宿泊施設も、かやぶき民宿が多く設備も不十分でした。また、大会コース作りも、大きな切りカブはのこぎりで切り、なるべくコブの少ないところを選びポールをセットしました。また、時計も勿論手動であり、スタートとゴールの時計を同時に動かし、タイムを計りました。しかしながら、白馬地方は中部日本学生スキー選手権大会を始め、全国大会、多くの国際大会を開催し、いろいろなスキー大会を経験したおかげで、第十八回長野冬季オリンピックの開催が出来る

感動と興奮を全世界に白馬から発信することが出来ました。特に私は中部学生の出身であり、そこで多くを学び、また、当初よりスキーに携わり、おかげさまで長野オリンピック時には、アルペンセクレタリーとして勤める事が出来ました。これも中部日本学生スキー連盟の皆さま方のお力添えの賜ものと感謝申し上げます。

選手の皆さんは、第五十回記念大会に出場出来ることに誇りを持ち、また、中部学生大会のの関係者の皆様方におかれましては、この歴史ある大会がこれからも益々発展されますよう、心よりお祈り申し上げます。そして、願わくばスキーを生涯の友として・・・

「シーハイル」

「ごあいさつ」

白馬村村長 福島 信行

雄大な北アルプスを背景に、白馬岩岳スキー場において第五十回記念大会を迎えた中部日本学生スキー選手権大会が盛大に開催されることに、村民を代表し歓迎申し上げます。

また、五十回という節目に立派な「中部学生スキー五十年の歩み」を発刊されますこと、心よりお祝いを申し上げます。五十年間という長きにわたり本大会を主催されました中部日本学生スキー連盟皆様、運営参加にご尽力いただきました加盟大学や、御支援賜りました中日新聞社始め関係各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

さて、本大会は白馬村で昭和三十四年(第四回大会・細野)、三十八年(第八回大会・西山)、そして昭和四十三年から現在まで四十一回の大会を開催させていただいております。

開催当初は炉端や達磨ストーブを囲み、スキーコースの整備計画や大会運営について取り組んだ想い出は、携わった皆様の心に今も残っていることと思います。

そして現在まで、本大会を始め幾多のスキー大会を経験したおかげで、平成十年には第十八回長野オリンピックが盛大に開催され、感動と興奮を当村から発信することができました。このことは関係各位の温かなご支援とご協力の賜でありますことに深く感謝申し上げます。

本大会は、現在三十六大学が加盟し、登録選手も約二百名を数えるとお聞きしており、選手の皆さんは中部日本の諸豪と会して堂々と競うわけでありませんが、日頃磨かれた技量とスポーツマンとしての意気と力を十分発揮し、母校の名誉と優秀なる成績のためにご活躍し、この大会が想い出深き記念大会になることを期待しております。

最後に、歴史と伝統ある本大会が、益々歴史を重ねられご発展されますことを祈念申し上げますと共に、関係されます全ての皆様に謝意とお礼を申し上げます、私のあいさつと致します。

## 中部日本学生スキー選手権大会 五十回記念大会を祝して

岩岳観光協会

会長 高橋 賢一

貴連盟主催の中部日本学生スキー選手権大会が、五十回という記念すべき開催年度を迎えられましたことに、心から敬意とお祝いを申し上げます。

半世紀に及ぶ大会継承の歴史は、大会関係者の皆様方のお力によるものであり、スキースポーツ文化向上への情熱と、スポーツマンシップに則してこれを成し遂げるといふ情熱とが礎となつて、長い時間をかけて築き上げられてきたものであります。時の流はスノースポーツ情勢に変化を及ぼし、マテリアルの開発はスキーの楽しみ方や用具にも多大な影響を及ぼしながら変化し続けています。このような時代変遷の歴史を踏まえ、岩岳スキー場において連続三十九回目の開催という長期にわたる催行ご努力に対しまして、地元を代表し深い感謝と御礼を申し上げます。

大会の歴史を回想する時、雪不足や悪天候で開催が危ぶまれ迷惑をおかけしたこと、手弁当で運営に走り回っておられた競技役員の方々の懸命な姿に加えて、かつて岩岳のピステに覇を競った選手達は、今どこで何をされているのだろうかと思ひ出されるものであります。継続は力なり、永きにわたる伝統に支えられた中部日本学生スキー選手権大会の今後ますますのご盛会と継承、貴連盟のさらに大いなるご発

展を願いつつお祝いのご挨拶といたします。

益々のご発展を記念申し上げます。

## 第五十回 中部日本学生

### スキー選手権大会開催に向けて

岩岳観光株式会社

代表取締役社長 北澤 禎一郎

中部日本学生スキー連盟五十回記念大会開催にあたり心よりお慶びを申し上げます。併せて、当地岩岳スキー場での開催につきましても、西山スキー場からはじまり三十九回を数える事ができるということ、長きにわたる格別のご厚情につきまして感謝申し上げます。

数多くある学生スキー連盟や組織のなかで、そのご活躍を拝見いたすところ、貴連盟のたゆまないご発展には、目を見張るものがございます。大会の運営などにおきましても関係各位のご活躍はもとより、参加される選手の皆様の高いレベルを見るとき、五十年という歴史と伝統に裏打ちされた歩みをそこに見ることができません。

スキー人口の減少などとともに、スキーを取り巻く環境には厳しい状況が続いておりますが、スキー競技を通じて選手の皆様のスポーツマンシップが高められ、更にお互いの親睦を深められんことを切望いたします。そして、願わくば生涯のスポーツとして、スキーを楽しんでいただけることを……。

末筆になりますが、五十回記念大会を一つの節目に、貴連盟の今後

### 歓迎のことば

白馬観光開発(株)岩岳営業所

所長 奥原 良治

中部日本学生スキー連盟が主催されるスキー大会が、今回五十回を迎えるとお伺いし、これまで継続にご尽力された関係各位に心から感謝と称賛を贈りたいと思えます。近年スキー産業はかつての元気が影をひそめ、スキー場の閉鎖等の暗い話題ばかりが目に入る様になってきました。そんな中で、今回貴連盟が五十年の長きに渡り続けてきたスキー大会が、いかに歴史と伝統を継承してきたことのご苦労を思う時、頭が下がる思いです。この学生大会が、スキーヤーの底辺の拡大と、スキー場の活性化に寄与し、将来に渡って参加された学生諸氏の親睦の一助になっていただければ、会場となった岩岳スキー場としても、地元をあげてご協力させていただきます。

一九九八年の長野冬期オリンピックが感動と興奮を伝え、終了して七年が過ぎました。深い雪に閉ざされて、子供達の楽しみはスキーかスケートであった白馬村が、世界の注目をあびた一瞬でした。成功裏に終了できましたことは、競技運営の自信が財産として残っております。

第一回目の大会に出場された選手の皆様の中には、お孫さんもうらっしゃる年代になったのではないのでしょうか。記念大会を思い出し、

是非家族、ファミリーでスキーを楽しんでいただけでは幸いです。現役選手諸君は、日頃鍛えた技量を發揮し、悔いのない戦いをし、優秀な成績をあげるため精一杯活躍されんことを、ここに祈念します。

最後になりましたが、この歴史と伝統ある大会が益々回を重ね、盛大にならんことを願うものです。また、役員、関係者の皆さん方のご苦勞に感謝申し上げ、本大会が成功裏に終えることを願って、歓迎の言葉とさせていただきます。

## 中部日本学生スキー選手権大会

### 五十周年記念に際して

白馬岩岳スキースクール

校長 吉沢 勇

中部日本学生スキー大会五十周年おめでとございます。五十年の間、全日本学生スキー大会と並行しながら学生スキーの発展と、数々の名選手をつくられていただきました連盟の皆様には、心より敬意を表します。

競技スキーは五十年の間に用具やルールのみならず、選手の考え方においても大変進歩的に変化をして来ましたが、そついった中で選手の指導と共に大会を継承されていただきましたことは、本当に素晴らしいことと思えます。本大会は、スキーの本場であります中部地区の学生スキーの強化育成のみならず、スキー界の活性を担う大変重要な

位置にあると思えます。シーズンオフの苦しい体力作りトレーニングを積んで、白銀の大自然の中で行うスキースポーツは、経験した者しか味わえない醍醐味と爽快感があります。また、この経験は実社会の中におきましても、いろんなところで自信につながり、また貢献もできることと思えます。本大会で育つた選手の皆様が未永くスキーを愛し、スキーを続けていただくことを願う者であります。

本大会におきまして岩岳スキースクールでは、競技運営部門において微力ながら毎年ご協力をさせていただいております。百分の一秒を争う競技の中で、選手の皆様が十分な力を出せるよう今後共ご協力をさせていただきます。

本大会が益々活気が上がり、スキー競技を愛する人達が多くなりまことを祈念して、五十周年へのご挨拶とさせていただきます。

## 中部日本学生スキー連盟五十周年を祝う

中部日本学生スキー連盟 地元協力会

会長 吉沢 篤

中部日本学生スキー連盟五十周年誠にありがとうございます。貴スキー連盟五十周年の記念大会開催及び中部学生スキー五十年の歩み発刊にあたり、地元協力会を代表して一言ご挨拶申し上げます。

はじめに、半世紀に渡る間貴スキー連盟の運営にご尽力いただいた関係各位の皆様と、歴代の連盟役員の皆様方に深甚なる敬意と感謝を

称したいと思いません。また、五十周年記念大会を初め、中部地区にも数多くあるスキー場の中から、白馬岩岳スキー場をご推薦いただいておりますことに対し大変嬉しく感謝しているところであり、あらためて心よりお礼申し上げます。

歴史と伝統を継承して開催し続けてきた本大会も、近年では、スキー人口減少の影響で参加校、登録選手数が減ってきている状況下にあるながらも、全国有数の大会に発展してきていることは、ご同慶にたえない次第であります。第十三回大会以降当岩岳(西山)スキー場で開催しているところでありますが、往時を顧みる時、雪不足時の大会開催、三十年前、当時のゲレンデ整備、距離コースをカンジキでの圧雪等、今では想像もつかない様々な出来事が懐かしい思い出となつて蘇ってきます。

私達地元協力会も初心にもどり、選手皆様方が最高の条件でスキー大会に臨めるようスキー場、宿舍の環境づくりに努力して参る所存であります。皆様方のあたたかいご指導、ご理解、ご協力のもとに末永いお付き合いができますことを願っておりますので、どうかよろしくお願いいたします。

最後に、貴スキー連盟の益々の発展と関係各位の皆様方のご活躍をご祈念申し上げます。

## 五十回開催を祝つ

副会長 石川 智朗

(信州大学卒)

中部日本学生スキー選手権大会第五十回を迎え、感慨ひとしおに思

うところである。昭和三十一年、富山大学の呼びかけで、宇奈月へは、信州大学から教育・織維・文理の三学部が参加をしました。翌年は、信州大学主管で野沢温泉で、次は新潟大学主管で池の平での開催でありました。中部日本学生スキー連盟としては、第四回の八方からであります。今では冬季五輪開催の世界の八方尾根スキー場ですが、当時は、八方でのクロスカントリーは初めてのことで、五龍館の中村孝光さん、白馬スキークラブの坂戸さん、松沢さん等の協力をいただいて、検縄で距離を測定してコースを作ったものでした。今と違って、人力でコースを作り確保することですから、吹雪の日は早朝暗いうちから、コース確保に回ったこともありましたが、それでも連盟の中核になって、諸事万端にわたり精力的にリーダーシップを発揮してくださった、名城大学の工匠忠雄先生のお陰で、順調な船出でありました。

技術面では新潟大学の石巖先生のご指導をいただいたこともあり、有難いことであります。次の八方での開催の時でしたか、非常に雪不足で名木山ゲレンデに雪がなく、ゴール地点を「すば」に変更。ここの壁面のブッシュが危険ということで、現役選手を総動員して、各宿舍からノコギリ、ナタ、カマ等をお借りして、これの除去を行なった。夕闇せまり薄暗くなり、麓の宿舍の灯りが輝きを増すころに、やっと電話線設置が終わり、拡声機に乗って流れてくる大相撲初場所の放送を聞きながら歩いて下ったことでした。子供の好きなものの流行語に、「巨人、大鵬、卵焼き」がありました。丁度そんな頃のことです。獅子吼では、県連の西原会長のお世話になり、野沢では富井賢治さん、西山では平林堅先生と夫々の地域でのスキー界最高の先輩のお世話、ご指導をいただいたことは、誠に有難いことであります。

私は、この中部日本学生スキー大会での経験を基にして、インカレ、全中、県大会、白馬少年などなど、多くのスキー大会ほど、OB等が集まって和気藹々と造り上げて行き、喜びを分かち合う大会は、他にはないと思っています。近年では梶原進一さんを中心に、それ以前は上田宣昭さんを中心にして、更には工匠先生を中心にして、OBが裏方として持ち場をきっちりと遂行しています。各々が夫々の職場を持

っている中での奉仕であり、稀有なことであり心から敬意を表すところと思います。

岩岳スキー場に関係する皆さんにご後援を賜り、中日新聞社、北陸中日新聞の御力をいただき、この中部日本学生スキー連盟の前進を祈念して感傷にひたりたいと存じます。宇奈月での宿舎、福井館でスタートした全信大スキー部にもエールを送りつつ・・・。

## 五十周年記念大会を顧みて

副会長 伊地知 信人

(富山大学卒)

昭和三十一年一月第一回中部日本学生スキー選手権大会を、北信越国立五大学により富山県宇奈月温泉スキー場で開催して以来、はや五十年、ここに第五十回記念大会が岩岳西山スキー場で開催できることは、実に感無量であります。よく継続してここまで来れたものと思う。これも偏に、第二回以降中部日本学生スキー連盟の本部を引き受けてくだされ、中心となつて連盟を支え、発展させられてこられた名城大学と同大学のOBの方々、大会共催者としてこれまで多大のご支援をくださつた中日新聞社、北陸中日新聞、大会会場や競技運営にあたり永年ご支援くださった白馬村ご当局、岩岳観光協会、岩岳スキースクールほか関係各位のご協力によるものと思います。この大会を発案し、第一回大会開催に携わつた一人として、衷心よりお礼申し上げます。

この間、参加大学の範囲は中部九県にわたり、ピーク時の参加大学数は述べ七十を超え、出場選手数も八百人以上と大発展を遂げてきたのであります。これによる、中部地区における学生競技スキーの発展

への貢献は絶大なものと思う。

昨今、バブル崩壊後の景気低迷の長期化、学生アルバイト先の激減の一方で、自動車、携帯電話、パソコン、インターネットの普及による出費の増大、趣味の多様化、更に少子化の進行の追い打ちによるスキー人口の激減がスキー場の存続をも危うくしているのであります。しかし、大会発足の原点たる国立五大学から見れば、男子二十一、女子十五大学の参加が見込まれるのであり、当分大会は継続可能と考えられるが、連盟としても一層魅力あるレベルの高い大会に努めるとともに、新規加盟大学の勧誘に努力しなければと思う次第である。

最後に、関係各位に置かれましては、中部日本学生スキー選手権大会の末永き継続のために、絶大なご支援を賜りますよう心からお願い申し上げます。

## 中部インカレスキー五十周年を迎えて

副会長 小林 明 発

(名古屋工業大学卒)

中部インカレスキーがこのたび五十周年という真に大きな節目となる記念すべき大会を迎える運びになりましたこと、慶賀の至りであります。多くの紆余曲折を経ながら、本大会が半世紀に亘り発展・維持されてきたことに思いをいたし、改めて関係各位のご尽力に深謝申し上げます。

筆者が初めてこの大会に参加したのは西山スキー場で開催された第八回大会からでありましたが、当時は現在の大会のホームグラウンドである岩岳スキー場はまだなく、リフトもガタガタのものが一本ある

のみで、滑降競技の時はコースを踏み固めながら全員でスタート地点まで歩いていきスタートを待ったような時代でした。当時の用具やウェアは現在のように保温性に優れておらず、スタートする頃には身体が冷え切ってしまったような時代でしたが、それでも競技スキーの持つ魅力に取り憑かれ夢中であつた学生時代、そして大学院時代に計時員として大会役員の末席で手伝いを始めてから早や四十年以上の歳月が過ぎたこと、改めて自身と中部インカレスキーとの繋がりに思いを深くしております。

中部インカレスキーの五十年という歳月を省みたとき、まず特筆すべきは、現役の学生時代に本大会を創設された富山大OB伊地知信人大先輩、信州大OB石川智朗大先輩が現在も大会役員の重鎮として大変お元気で本大会の運営に携わられておられることであり、誠に喜ばしく心強い限りであります。これからも益々お元気で大会の発展を見守っていただきたく思います。本大会は、第三十回記念大会誌の中で本大会の創設者のお一人である信州大学OBの矢野想之輔大先輩が記述されているように、現役の学生が提唱して始めた大会であり、草創期から財力も人手も不足した中で続けられてきた大会であります。そのような状況の中で、本大会が学生スキー大会の中で屈指の大会と位置づけられ、五十年という輝かしい伝統が築き上げられてきたのは偏に草創期から多くのOB・OG諸氏そして現役選手諸君並びにホームゲレンデである地元の皆様方の競技スキーに対する熱情と理解によつて支えられてきた正に手作りの大会であることによります。この間、草創期より本大会の発展に大変な尽力を尽くされた名城大学OBの工匠忠雄大先輩を始め、多くの諸先輩が鬼籍に入られております。改めてご冥福を祈りますとともに生前のご尽力に深謝申し上げます。本大会も五十年という歳月の中で、最盛期には参加選手が八百名を超えた時代もありましたが、十八歳人口の減少、趣味や嗜好の多様化等競技人口は減少し、年々スキー人口は減少してきており、大会運営が極めて厳しさを増しているのが現状です。本大会も、これまでの良き伝統を生かしつつ時代に即応した柔軟な運営が強く要求されてくると思いますが、学生諸君が競技スキーを通じ自己体现の場として本

大会が隆盛のうちに受け継がれ、六十周年、七十周年、…そして百周年を迎えられるよう祈念し、また微力ながら大会運営に協力することを心に誓い、筆を置きます。

## 中部日本学生スキー大会と私の人生

常任理事 富田 三代治

名城大学(昭和三十九年卒)

中部学生日本スキー大会五十周年記念大会おめでとうございます。計り知れない多くの人達のご苦労とご協力、ご支援誠に有難うございます。この場をお借りし感謝申し上げます。私も縁有り仲間入りさせて頂きました。これからも皆様の御協力をいただきながら最善の努力で務めて往きたいと思っております。今夏はオリンピックと超暑い熱帯並の日々であつた。夢と感動を与えてくれ、私達の業界にも少しの景気をもたらし恩恵が有つたのかと感じております。金、銀、銅の多さは最多タイとなり、日本も世界に誇れる国としてアピール出来たと思えます。私達もじつくりと腰を落着け、自分の生活に目を向け何が良いか何が悪いのか反省をする時間を持ちたい。

私事で誠に申し訳御座いませませんが、毎年の生活の一端を紹介させて頂き挨拶とさせて頂きます。

遡るが今年の初冬休みができたので岩岳、八方の白馬連峰を見たことである。ここの山々を眺めていると昭和三十年代の自分の心にもどる。二〇〇四年一月三日雪道の川の側道を登って往くと白馬村松川の上流二股橋に着いた。遙か西には白馬三山が眼前に大きく見え深い厳冬に來たのは生まれて始めてである。ここには中部電力二股変電所がある。更に上流に登れば猿倉、白馬岳大雪溪と続く。今は大雪のため、

柵が有り通行止めである。すぐ傍には白馬八方温泉、小日向の質素な看板だけが目立つ湯が有った。今は雪に覆われている。周りを見渡すと人氣は無く、何故か静けさが更に増して、周囲の落葉した木々と一面の雪原と白銀の世界が引き締まる。雪が森林に溶け込み、冷えた空気が凜として体も心も一瞬凍りつく、誰も居ない回りの景色も、雪、雪と一層静けさを増す。眼前には白馬三山、白馬鑓、杓子岳、白馬岳が崇高に見える。

今年も家族スキーで、息子、娘、孫達と共に白馬に来た。スキーは持参したが孫のお守り、それよりもスキーをセツテングして滑ろうとする気が起こらない。脚力が衰え、怪我をしたらいけないと言う気持ちだろうか。何年ぶりの白馬村の景色見学、ジャンプ台、五日後の大会控えたハーフパイプ、整備されたコースの見学となった。

かつて民宿で泊まった五龍館、名木山館。民宿の木造のむき出した屋根裏如き部屋に泊まった思い出が蘇る。以前の面影はもう無い。村の中は綺麗に整備され、名木山館はローゼンハイム白馬と名前を変えジャンプ台の前に有る。周囲はスイス風の洋館が建ち並び北歐風の建物が構築され、これが白馬かと一瞬目を疑う。時代の発展が随所に見られている。かつてスキーメツカの地、バブルの時代に築かれた建物だ。更に、信濃森上駅に移動を試みる。この駅から合宿所、山満平民宿まで雪に埋もれた田畑の道を二十五分、よく歩いたものだ。当時は、玄関を入ると馬が2頭待っていた。田舎の穏やかな和み、かつての田舎の土産屋の賑やかさは無く、店先の鳩車と雷鳥の木彫りも無くなっていた。時代の流れを感じる一時で有った。

夜、食事の後、お茶を呑みながら何となく宿のお母さんに、今と昔の学生堅気を聞いてみる。「なんだね、昔の合宿、学生グループ(三十人位)の中には必ず一人ぐらいは台所に入ってきて、一緒にお菓子をお茶を飲んだり話をする。面白い個性や親しみの有る学生が居た。今は、年相応に標準化された学生は居るが、自分の殻を破るような人間は少無い。昔も今も、若さにそんなに変わりはないと思うが、特徴の有る学生が少なくなつたとの弁であった。

私は今、こうして白馬の地に来て考える時間が持てた事に幸せを感じ

ている。かつてノルディックスキーの知らない私が、福井や北海道、信州、名古屋の仲間と、来る日も来る日もコースを替え、条件を変え、ワックスの気候条件の特性と性質を学び、鶴来、野沢、志賀、梅池とスキー場を替え、明日に向って切磋琢磨し、練習した青春の日々。インカレにも参加し、情熱と闘志に燃えた日々、合宿中の遊び、食事のマナー、また活動中の絶対的な上下の規律。

最近これらの事柄が、人生に大きな変化を齎したのだと考えるように成ってきたのも年のせいだ。青春時代にスキーを学んだ事が、後の人生に様々な事柄と、多くの人達と現在でも交流出来ていることに今幸せを感じている。

今年も、六日より岩岳の地で中部日本学生スキー大会が開催された。最盛期には参加学生八百十五人、男女国公立七十八大学の大会で有ったのが、今年は百七十五人の参加である。私も端くれとしてお手伝いをさせて頂きノルディック競技雪の降る中、有る大学のスタイルの良、色の白、可愛い学生にお会いできた。「何処の出身ですか」と尋ねてみる。「岩手県から来た、山形県新庄北校出身、大会前には一生懸命練習もした。昨年は受験の為それ程練習はしていないが、一生懸命走つてみる。」とコースを後に森林の中に走って行った。滑走すれば、スタイルもホームもオリンピック選手並に決って滑っている。後続をはるかに離し、トップでゴールし優勝した。試合後、何で名古屋に来たのか尋ねたところ、「この大学にはスポーツ健康学科が有る、食品、バイオに関するスポーツ健康の学問を学ぶのだ。」自分で選んだと聞き私は感激した。若くても自分の将来を見据え、目的を持った学生が居ることに私は爽やかな心が持てた幸せを感じた。後に全日本級クラスの姉が居り頑張つて居ると聞き更に驚いた。華麗に滑れる訳だ。

平成十七年は、岩岳スキー場で四日から連盟発足五十周年記念大会が開催される。白馬村、観光協会、地元民宿等関係者、学生やOB諸氏の並々ならぬご努力と、ご支援ご協力で深く感謝申し上げます。又、この伝統と歴史有る大会も皆々と先輩から後輩へと続き、数多くの大先輩や学生諸氏が築いてこられたことに深く感謝致します。

これからも、さまざまな夢と感動と想いで、多くの人達に残して戴けるこの大会を大切に、後輩に続くことを願ってお祝い申し上げます。また山の自然に感謝し畏敬の念を忘れずスキーを楽しみたい。明日には新しい発見と新しい未来があるでしょう。

## 中部日本学生スキー連盟 エリート・スキーヤーの育成に向けて

常任理事 大谷 吉 生

金沢大学(昭和四十九年卒)

中部日本学生スキー連盟発足五十周年おめでとうございます。私はこの大会と同じ歳を数えていることもあり、自分の半世紀という年月を振り返ると、自分が多くの人に支えられて今があるように、この大会も多くの人の努力により今日に至っていると思います。本大会をここまで実質的に支えてこられた故工匠先生、梶原先生のご努力に心から敬意を表します。

さて、残念なことですが、最近のスキー人口の減少は著しいものがあります。バブルの時期、誰も彼もがスキーをしたときには、このスキー場に行っても週末はリフトに長蛇の列ができました。だから、大学生の特権を活かして、授業をサボって平日にスキーに出かけたものでした。しかし、今では週末に行っても全くりフト待ちをせざるを得ないのがあたりまえになってしまいました。スキー人口の減少に伴い、大学スキー部の部員数も激減し、休部、廃部をやむなくされる大学も出てきています。

体育会系の部員数の減少は、何もスキー部だけに限ったことではなく、ほとんどのクラブが直面している問題です。大学進学を希望する学生が全員入学できる大学全入時代(ユニバーサル・アクセス時代)

がすぐそこまで来ています。入試という厳しい関門をくぐり抜けたというエリート意識が欠如した学生が増え、楽をして大学を卒業し一流会社に就職すればよい、そんなことを考えている学生が多くなっているのは、大学で教鞭をとる私にとって悲しい事実です。なんでわざわざ苦しい体育会系のクラブに入らないといけないんだ、という具合です。

競技スキーは、このような学生の性根を根本から鍛え直すのに最も適したスポーツと信じています。長いオフシーズンには、来たるシーズンでの自分の滑りを頭に描きながら、スキーを履くこともできず陸トレに励む、そして、シーズンが訪れ、スタート台に立ったときには既に勝負は付いている。様々なスキートレーニング法が開発され、雪がなくてもスキーを履いて練習できるようになりましたが、やはり、競技スキーの醍醐味は、人より早く滑りたいという気持ちだけドライビングフォースに、スキーを履くこともできずにシーズンでの自分の滑りを信じて、長い期間、苦しい陸上での練習に励むことにあると思います。苦しければ苦しいほど、そして苦しい期間が長ければ長いほど、ヒトは肉体的にも精神的にも成長します。

ここで私の言うエリートとは人生のエリートであり、単に頭がいいというエリートではありません。人生で「魅力ある人間」になるという事です。これまで、本連盟はこのような卒業生を確実に輩出し、大会役員として集まってくれるOB・OGは、そんな「魅力ある人」の集まりです。

競技スキー人口の減少は逆に考えると、競技スキーを志す皆さんにとって、いろいろな大会で入賞、優勝できるチャンスが増えるということになります。国体代表、オリンピック代表も夢ではありません。他の人がしないことをする、すなわち *one up one down* になることは、*one up* になる最も近道です。競技スキーを始めたいきっかけは様々だと思いますが、現役の諸君は今や開始した競技スキーを四年間続け、是非、中部日本学生スキー連盟エリート・スキーヤー集団の一員になってください。

## 五十回を数えるにあたり

常任理事 東樹明仁  
(連盟推薦)

今思うと、二十三回大会の時に梶原氏より、半ば強制的に連れてこられ、あつという間に五十回の記念大会となり、年月の経つ早さに驚いています。

二十三回大会から二十五年記念大会までの二年間はものすごく印象に残ることが数あり、本当に真剣勝負で取り組んで来ました。真剣がゆえに、皆さんとぶつかることが多くありました。三年位で大会の流が少々分かり、次のこと、次のことと頭も働くようになり、少々大会運営というものになれ、何とかスムーズに行くようになりました。この頃から毎年来ていただけの役員の方も増えだし、梶原氏を中心に先輩役員の助けもあり、役割分担が出来るようになり、選手の人数が増えてもうまく裁けるようになりました。勿論スキー学校、中日新聞社、地元関係者の協力が非常に力強い助けになっています。

特に、スキー学校の大会運営の組織力及び機械力、本当に頼もしく思いました。私はこの大会を通じまして、いろいろなことを学ばせてもらい、非常に感謝しています。特にこの二十七年間にいろいろな人達に出会い教えられた事は、限りない私の宝となっております。私は二十八年前二十四歳で独立し、店をもちました。下積みも無しで、一国一城の主になった訳です。主といっても三坪半の店でした。中部学生の役員として参加したのが二十七年前なので、大会と一緒に店も歩んで来たわけです。下積みのない分、この大会運営が勉強だと思いい生懸命やりました。商売も、大会運営も一緒でした。みな、その時その時一生懸命にならないと運営して行けません。選手の皆さんも、

入賞するんだ。優勝するんだ。一部に上がるんだ。何でもいい。一生懸命、希望と夢を持って努力した選手が必ず勝つのです。会社運営も、大会運営も、サラリーマンも、学生も、全で一緒です。現役諸君が卒業し社会人になっても、この気持ちさえ持ち続けられれば、人生の困った時に、絶対乗り越えられるでしょう。僕が中部学生で学んだことは、この、”やるんだ” ”するんだ” の精神なのです。今後も、まだまだ続くこの大会を大いに盛り上げ、微力ながら力になってゆこうと心に誓っております。

最後になりましたが、五十周年記念大会おめでとうございます。また、スキー場でお目にかかれる日を心待ちにしております。

## 中部学生の役員にはまつて

理事 出雲哲也  
金沢大学(昭和六十年卒)

一九八五年三十回記念大会が最初の役員としての参加でした。このときはバブルのはしり、また競技スキーの絶頂期とも言える時期でしたので、たくさんのお寄付が集まったのか、船盛りのお刺身やビールのケースが山積みになっていました。あまつたお酒やおつまみは当時の役員宿舎であった西山ヒュッテに運ばれ、大会期間中どんなに飲んでお酒が切れることはありませんでした。新米役員の私は諸先輩役員の方々から大歓迎(?)され、大好きなお酒を毎日文字通り浴びるほど飲み、毎晩酔いつぶれていました。また当時は若い女性役員も必ず何人かいましたので、やさしい女性役員に毎晩介抱されていました。

そんなわけで楽しい役員という業務にはまつた私は、以後役員を続

けることになった訳です。その後も毎年役員に行く度に新しい出会いや楽しい出来事があり、自分の人生に大きな影響を与えていただきました。中部学生の選手、役員として参加できたことに心から感謝すると共に、今後環境の変化に屈することなく、中部学生大会が永遠に続くように、わずかながらでも力を尽くしていきたいと思っています。中部日本学生スキー選手権大会が、五十回大会を迎えるにあたり、大会役員として・・・。

## 中部インカレに参加して

理事 石橋 聡

名古屋工業大学(昭和五十八年卒)

中部インカレ五十周年おめでとうございます。

現役の時二十五周年、役員としてお手伝いしながら五十周年、中部インカレの節目の記念大会に参加し携われたことを光栄に思います。思えば、中部インカレは「悔しさ」を味わう大会でした。一年で、雪踏みの悔しさ・夜のミーティングでは自分のチームが悪くないのに役員に怒鳴られる悔しさ・西山の大会バーンで凍った急斜面への恐怖からくる悔しさ・閉会式では賞状を見送り他のチームを羨望の目で見る悔しさ、でも二年でこの悔しさがバネになって、一年のガンバリで急斜面を克服し入賞できたのに、三年で入賞がフロックといわれた悔しさに立ち向かえども雪不足で競技中止の悔しさ、四年でやっと心にも余裕を持って大会にのぞむもコンタクトレンズがはずれ入賞を逃した悔しさ。悔しさばかりが残った中部インカレです。しかし、中部インカレに向かってチームと一緒に真剣にスキーに挑み続けた一年一

年を積み重ねたことが、チーム仲間も自分も他の大会での成績に結びつき、中部インカレでえられた先輩・友人と卒業後も付きあい、結婚相手にも巡り逢うことができました。

OBとなっても岩岳とのつながりが続いたのに、長野オリンピックに呼んでももらえなかった悔しさがあります。後で、「お前に手伝ってもらえればよかった」といわれても残念でしたがありませんでした。しかし、志賀のワールドカップで役員をお手伝いできるチャンスを与えられたのも、中部インカレのOBとのつながりと感謝しています。

中部インカレには、長野オリンピックを成功させた最高のスキースクールスタッフがオペレーターとして中部インカレに携わっていることを、学生選手の皆さんには知ってもらいたいです。多分ワールドカップを除いたら日本で最初のコンピューターシステムが岩岳スキースクールでできたのではないかと思えます。竹ポールの時代に岩岳で始めて光電管が採用されました。役員としてお手伝いした最初の年は現役時代と変わっていないゴールの計時計測の流れをみて、これからはコンピューターの大会だとスキースクール校長の矢口公勝さん・平林英夫さん・梶原さんはじめとする中部インカレスタッフが協力をし、一年後にはコンピューターによるプログラムが完成し、コンピューターによる即時速報が出せるようになりました。

選手の皆さんには、二十五年前よりも少ない人数で大変なこともあります。中部インカレで上位を目指すこと・チームが一丸となること・ライバルチームを持つこと・合宿費のためにアルバイトに励むこと・まづガンバルことがその後の人生の實りに十分つながると信じてガンバってください。私もガンバリます。また、この中部インカレが永続的に続くことを願っています。

## 第五十回記念大会に寄せて

### 昭和から平成の時代へ

理事 石橋 聡

金沢大学(昭和六十一年卒)

中部日本学生スキー大会が、五十回大会を迎えるにあたり、大会役員として参加できることを嬉しく思うとともに、これまで常にこの大会を支えてくださっている地元の皆様、共催として多大な支援をいただいている中日新聞社はじめ関係各社に、感謝と敬意を表したいと思えます。

さて、私が中部日本学生大会に選手として参加したのは、第二十八回(昭和五十八年)から第三十一回で、翌年の第三十二回から以来ずっと大会の不思議な魅力に取り付かれ、大会役員として参加しております。

ここで、私の思い出深い大会を紹介します。

第三十四回大会は、私が大会役員としてお手伝いし始めた三回目の大会でしたが、その開幕日は、日本の歴史の中でも重要な日にぶつかりました。それは、大会の前日、昭和天皇がご逝去されたため、大会はそのまま予定通り開催できるか非常に危ぶまれていました。事実、一月八日、同大会の開幕日に予定されていた日の他のスポーツ、例えば、大相撲、ラグビー、サッカーなどの競技がほとんど延期になるなか、第三十四回大会の開会式は、亡き天皇の冥福を祈って一分間の黙とうの後、整然としかも平成元年の初日にあたり、新たな決意のもと開催されました。特に、選手宣誓では、中京女子大学の主将が「平成元年」の年号で宣誓し、その前日のニュースで新年号の名は知っていたものの、新しい「響きを感じ、私自身も新たな時代が始まったのだと感動しました。また、本大会本部の決断の早さと継続に対する意志の強さに感心しました。このよ

うな感動的な大会を経験したからでしょうか。現役であった第二十八回からのプログラムから、そして今年は第五十回のプログラムが私の書棚に並ぶことになりそうで、非常に感慨深く感じています。

なお、これから本大会が、六十回・・・と続いていくことに微力ながらお手伝いしたいと思えますので、関係者の方々よろしくお願ひします。

### 初心忘るべからず

顧問 矢野 想之輔

(信州大学卒)

思えば五十年前、当初は五つの大学のスキーの好きな学生達で段取りをして、滑りつこに熱中したのがそもそもの始まりと聞きます。これが次の年には七校に増え、年を重ねるごとに増え続け、当番校制では処理しきれなくなり、各校のスキー関係有志によって連盟誕生となったのは、皆さん既にご存知のとおりです。何でも最初に思いついて実行に移した人達は立派なものです。

連盟とその行事が難関を抱えながらも、紆余曲折を経て今日に至るまで、実に多くの各地元の皆様方の格別のご協力とご支援あつてのこと、これはこの連盟に関わった学生、OBともに決して忘れてはならないことです。多くの学生、OB役員達もよくもまあやって来たものだと思嘆のほかありません。この永年の間、実にいろいろな逸話や出来事がありました。それには多くのあの顔この顔が懐かしくありありと思ひ出されます。

フレンチ メソッドのスキーが日本を席巻した頃に始まり、また合板スキー、ラングリーメンの締具の頃から現在に至るまで、大会の運

菅背景や方法に、連盟なりきの思い出深い歴史があります。歴史は、文章にして記録を残すことが出来ます。しかし、この大会の雪の中で実に多くの人達が出会い、それぞれの人生の糧となる貴重な体験を得たと言う「心」については、文字に表すすべもありません。

「初心忘るべからず」とはよく耳にする言葉です。力及ばぬ所は字外のお助けを受けながら出来る限りは自分達でと、なりふり構わず学生達が不馴れな中を協力して造り出したのが原点であり、初心でもありません。これを年頭に置きながら、この連盟が今後もその意義を踏まえ、堅実に運営されて行くことを願って止みません。

雪に結ばれる人の輪に幸いあれ。拍手。

【追記】この五十年間の後半、体不調とはいえ連盟のお手伝いから遠ざかっている私には、以上の様なことを申すのはおこがましい思いがいたします。でも更に一言。

多くの皆様のご尽力のお陰様であることは云うまでもありませんが、とりわけ終始親身も及ばぬご指導ご助力をいただいております西山の平林 堅先生、学生時代から今に至るまで役員として、実に半世紀以上の永い間勤めてくれている石川智朗、伊地知信人の両氏、そして、連盟の諸事を一身に背負って懸命の努力を続けていくくれる、梶原進一氏に心からの敬意と感謝を捧げます。

## 引退・伝承・感謝

顧問 平林 堅

(元競技委員長)

中部日本学生スキー選手権大会は、回を重ねること今年で五十回の記念すべき大会となりました。

思えば、工匠先生(故人)が第八回大会の年私の所に来て、競技会を引き受けてくれないかと、との申し込みがございました。これがご縁となり、第十三回大会より今日第五十回大会まで、連続して競技会をお引き受けすることになりました。中部学生スキー選手権大会のホームグレンデとして、今日に至っています。

私は競技委員長として、一昨年まで長期間運営にあたらせていただきました。厚く御礼申し上げます。私が長野県スキー連盟副会長として、また、選手監督として長期間冬季国体に選手を引率して競技会に参加したことが、中部学生の競技運営に大きな参考となったことと思えます。今は八十八歳の老齢となり、スキーを着けて飛び廻ることが出来なくなりましたので、第一線から引退させていただくことといたしました。長い間お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

中部日本学生スキー選手権大会の運営について、工匠賛成亡き後、梶原先生に頼るところ絶大です。ご面倒よろしくお願い申し上げます。忘れてならないのは、OB役員の皆様です。この競技の運営のために、スキーシーズン以外は会社で日曜出勤して休暇をためておいて競技会に駆けつけ、直接運営にあたって居られることです。感謝、感謝です。厚く御礼申し上げます。